

Title	『班猫』寸描
Author(s)	榊原, 吉郎
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53382
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『班猫』寸描

榊原吉郎

栖鳳は数多くの動物を描き、名作を遺してきた。中でも大正13年の『班猫』¹は絹本着色の大作（82×102）に仕上がっており、昭和45年に重要文化財（指定番号1647）に指定された。彼の作品中、指定された唯一の作品であり、栖鳳の代表作といって過言ではない。彼は猫を描いた作品を数点遺しているが、明治25年の『猫児負喧』が最も若描きである。しかし残念ながら本画は失われ、王舎城美術館に下絵が遺されているのみであり、この若描きについては触れない。

『班猫』は実見する機会が度々あり、不思議な作品であるという印象が付きまどってきた。それは作者の作品に対する思い入れが大きいと云うか、むしろ饒舌とも感じられる言説があることにある。さらに『班猫』の眼の表現²がこの作品の魅力の中核を形成しており、数多く様々な動物を描いた彼の作品の中でも特異な表現を示しているからでもある。

画家が描いた作品について、自ら多くの言葉を書き記していることは、そこに記された内容が鑑賞者に独自の印象を植え付ける、と同時に作品解釈の方向をも決定することになる。では何故、栖鳳はこのような行動を起こしたのかが、気になる所である。昭和8年8月の『文藝春秋』に次のように記している。

「……無意識に、「ははあ……。徽宗皇帝の猫があるぞ」といったんそうだ。それはわたしの傍にゐた人が、後でわたしに話してくれたことで、わたしはその時、何を喋舌つたか覚えなかつた。……事実、わたしは、その場合、その猫が現実の動物ではなく、徽宗皇帝の描いた猫の画に見えた。だから、考へ

方によつて、徽宗皇帝の猫は、それほどまでに真迫の作品だともいえる。兎も角わたしはその場に踏ん立つてスケッチを始めた。そして宿へ帰つた。だがどうしてもその猫を諦めることができなかつた。街上に踏ん立つての写生位では、核心までその猫が掴めてゐないやうに思はれて残念だつた。枕に就いても、その猫のことを考へると、その猫のよさは無限であるやうに思はれた。……だが生憎と、その猫はその八百屋のカミさんの手飼ひの愛猫で、容易に手離してくれない。八百屋の主人はわざわざ猫を宿まで連れて来てくれたが、猫にしては住居の様子がへんなので、暴れ廻つて主人の手を掻きむしって、流血の騒ぎを演じた。だが、再三交渉を重ねた結果、わたしの人物を説明して、一枚の画と猫とを交換して貰つた。そして沼津から京都へ連れ帰り、日夜座右に遊歩させて、あの作品を作つた。むろんその猫はもうわたくしの家にはゐない。あの作品を仕上ると間もなく、わたくしは東京に出た。その不在中、猫の行方は不明になつて了つた。ナンだか、わたしには、あの猫は本当の猫ではなく、誰かから徽宗皇帝の掛物を拝借して、それを返して了つたやうな気がしてならない。」

栖鳳はどこか中国の伝奇小説「聊斎志異」の一章のような記述をしている。

伝徽宗皇帝筆の『猫図』と栖鳳との関係については、「をりからの小春日和に栖鳳も湯河原の閑居からはるばる来館せられ、静かに絵から絵へ鑑賞の眼を移して、この「猫」の前に佇んだ時、その表情はさながらものに憑かれたやうに変わって、目を輝かして嘆賞の

声を洩らし、案内の私や同伴の人々を顧みて、深い思入れのある懐かしい京都言葉でその感激をいろいろと語られた。その微妙な線描毛描について、その品格のある色彩について、何等の景物を添えないで猫そのものを活かした大きい構図について、叡智から生まれる繊細を極めた写実の極について、耳の先から尾の末に至るまで神経の通ってある生命感の躍動について、ことにまた全画面に発光してゐる王者のやうな高致の品位について——私達は感想を語り合った。」と秋山光夫³は昭和12年に東京国立博物館で開催された『宋元画展』において栖鳳が実見していたことを証言している。しかし徳川慶喜に出会ったこともある栖鳳はこれ以前に徽宗の猫を見ていたことが想像⁴され、栖鳳の意識の奥に猫が強く刻み込まれていたことは否定できない。

この徽宗の猫と栖鳳の猫の眼に関して問題がある。徽宗の猫についてモノクローム図版⁵に頼らざるを得ないのだが、この両者の眼を比較すると、明らかに異なる。徽宗の猫の眼は鼠を捕らえる鋭く瘳猛といえる眼つきをしているのに対して、『班猫』の眼はどこか恨めしげに下から人間を見上げる愛玩用動物のそれである。

徽宗が描く猫は宋代の文人が意識していた猫を代表するものであり、一海知義氏が「猫を祭る」⁶として「飼い猫のことをうたった詩は、唐以前にはあまり見かけぬ。宋代になって急にふえる…当時の文人たちの飼い猫は蔵書を守るための、鼠よけの番人であったらしい」と指摘するように、鼠を退治する鋭い眼つきの猫が描かれるのである。徽宗の猫を意識していた栖鳳がどうして愛玩用動物の眼を描き出したのか疑問として浮上するのである。

結論を急ぐが、『班猫』制作当時の栖鳳を取巻く社会的状況を視野に入れねばならい

ろう。制作年の大正13年は関東大震災直後であり、門人であった橋本関雪との関係⁷が劣悪化していた時期に当たる。様々な風評「が飛び交っていた時期でもあり、昭和八年の栖鳳の言葉のみを頼りに作品解釈することや子息・竹内逸の解説にはいささかの疑念が生じるのである。

- 1 大正13年（1924）11月三越本店で開催された淡交会に栖鳳は「城址」「班猫」を出品。栖鳳は箱書に「班」を用いており、「斑」と同じ意味を持つものと栖鳳自身が意識していたと解釈できる。山種美術館では正式名として「班猫」を用いている。
- 2 《竹内栖鳳名作展》図録 昭和32年1月 東京渋谷東横店 主催毎日新聞社の解説
「…猫一匹を以てこの大幅を持たせたトコに作者の技量を買ふべきであろうし、東洋画の誇るべき世界であろう。そしてこの作の急所は白群色の眼であるが、この眼の表現効果のためには、体の色彩の濃度及び地塗りの調子が苦心されてゐる。制作直後はもっと青と金との麗日的地塗りが冴えてゐたやうに憶ふ。歲月とともに幾分燻つて了つた。」《竹内逸》
- 3 秋山光夫「猫画双絶」『国画』第三卷第三号、昭和18年3月号
- 4 田中日佐夫『竹内栖鳳』岩波書店1988・7・27
- 5 『宋元名画集』聚楽社・昭和7年 秋山光夫・相見繁一・田中一松
《解説書》「猫図 無款 東京 徳川家達氏蔵」
- 6 一海知義『漢詩一日一首〈春〉』平凡社ライブラリー 619 2007・9・10
- 7 『大阪毎日新聞』大正12年12月28日記事
「…栖鳳氏門下の橋本関雪氏が感情の衝突から24日遂に師匠栖鳳氏に弟子からの破門状を突付けるに至つた。…その画風が栖鳳氏と著しく相違しその性格に於ても関雪氏の放胆を忌むといふ風であつたが先年帝展審査員の推薦問題が起こつた際に栖鳳氏が関雪氏の任命を阻止せんとするが如き態度をとつて…最近又震災義金について関雪氏が師匠の栖鳳氏を凌いだとの非難を受けたので自尊心の強い氏は遂に堪忍の緒を切り…栖鳳門の全同人を以て組織し居る竹杖会脱退状を認めて会長栖鳳氏並びに幹事山本光雲両氏に提出…」